

日露戦争期の女性誌における 女性表象—『女学世界』を中心に

明 如雪

北海道大学 大学院文学院
映像・現代文化論研究室



未来社会のあるべきかたち

- ◆女性に向けて戦争を伝える重要なメディア
- ◆軍人の妻と母、看護婦、皇后など
- ◆当時の女性に求められた役割や価値観

日露戦争（1904～1905年）は、日本とロシアの間で行われた戦争であり、多くの女性も家庭や社会で戦争を支える役割を担った



『女学世界』第一巻一号
1901年1月5日

女性向け雑誌でありながら、日露戦争に関する記事や挿絵を数多く掲載し、女性にも戦争への協力を呼びかけていた



『女学世界』第四巻二号
1904年2月5日

女性誌における女性表象は？

家を支える女性

軍人の妻と母

家庭を守り、夫や家族を支える存在として描く

とくに未亡人には貞節を守ることが求められ、戦時の女性規範が示す



『女学世界』5巻2号（明治38年2月）眞龍齋貞水「乃木将軍と夫人」挿絵

戦争を支える女性

看護婦や愛国婦人会

看護や慰問、慈善活動を通じて戦争を支える存在として紹介

女性も後方から戦争に参加することが期待



『婦人画報』（明治37年7月号）「殉難の看護婦」

模範となる女性

皇后や将軍夫人

国家や軍人への献身を实践する理想的な女性像として描く

その姿は、多くの女性が目指すべき模範として読者に提示



『女学世界』4巻2号（明治37年2月5日）「皇后御尊影」（明治神宮記念館蔵）の局部

本研究の社会的意義

- ◆本研究は、『女学世界』に描かれた多様な女性像を通して、戦時に女性へ求められた役割や価値観を明らかにした。その成果は、メディアが社会の価値観を形成する働きを歴史的に理解するとともに、現代のジェンダー観やメディア表現を考える契機となる。